

# スパルタクスとその戦い

スパルタクス (Spartacus) とはー

紀元前 73～紀元前 71 年に起きた「第三次奴隷戦争 (スパルタクスの乱)」に於ける奴隷軍の指導者で、「プルタルコス英雄伝」クラッススの章に記述がある。

## ■第三次奴隷戦争 (スパルタクスの乱) 概要

- ・ 紀元前 73ー紀元前 71 年にかけてイタリア半島で発生した奴隷の蜂起とそれを鎮圧しようとするローマ軍との戦争であり、3 度に亘る共和政ローマ期の奴隷戦争の中でも最大のもの。
- ・ 発端はカプア (ローマとアッピア街道で繋がる南東の街) でバティアトゥスなる者が運営する剣闘士養成所から剣闘士奴隷 78 人が逃亡を謀ったもの。当初台所の包丁や焼串を手に養成所を飛び出した剣闘士奴隷は、途上で剣闘士用武器を運ぶ車を襲い武器を奪って武装し、ローマ軍を撃退した。そして奴隷軍はローマ軍を打ち破るたびにローマ戦士たちの用いる武器を奪いさらに強化していくとともに、奴隷を解放し牛飼いや羊飼いや大勢仲間に加え、勢力を拡大し全盛期に 12ー20 万人、壊滅の最終局面では 30 万人にも達していたといわれる。スパルタクス率いる奴隷軍はローマに攻め入るのではなく、アルプスを越えてそれぞれの故郷 (ガリア、トラキアなど) へ帰還することを望んでいた。
- ・ 奴隷軍のローマ軍撃破は続き、共和制ローマ元老院を恐怖に陥れた。そしてローマは遂に 2 人のコンスル (最高執政官) を奴隷軍征伐に直接派遣することとなるが、スパルタクスはこの 2 大軍をもそれぞれ打ち破ってしまう。そして遂にローマはクラッススに奴隷軍討伐の最高司令官を委ねることとなる。
- ・ ここへきて奴隷軍は南下してギリキア海と結びシチリア島へと渡りそこを奪取しようとしたが、これは海賊の裏切りに遭い果たせなかった。その一方でクラッススは粛清 (逃亡兵 10 人に 1 人を死刑に処すなど) を行いローマ軍を立直すとともに、奴隷軍の糧道を絶つべく長い城壁を建設していった。またスパルタクス以外の将に率いられた独自軍がクラッススに斃され 12,300 人の兵を失うという初めての大敗を喫する。更にクラッススがトラキアからルクルルス軍を、そしてスペインからポンペイウス軍をそれぞれ元老院を通じて召喚したことで、奴隷軍は急激に追い詰められていった。
- ・ 進退窮まったスパルタクスは全軍を戦列に配し、クラッススとの決戦 (シラルス川の戦い) に挑み最期まで勇猛果敢に戦ったが戦死、彼の率いた奴隷軍は遂に殲滅されたのであった。反乱奴隷はほとんどが戦死したが、クラッススに捕えられた 6 千人余りは磔の刑に処され、ローマからカプアに続くアッピア街道には延々と磔の十字架が並んだとされる。

## ■スパルタクス蜂起→勢力拡大の背景

- ・スパルタクスは、カプアの剣闘士養成所で訓練を受けていた「剣闘士奴隷」である。剣闘士とはローマ市民の見世物になるために、闘技場にて剣闘士同士で殺し合いをするか、或いは猛獣と戦う剣士のことである。スパルタクスは77人の仲間とともに養成所を脱走し蜂起する。計画を密告されるもその先手を打って実行し、成功したのである。
- ・スパルタクスは「命懸けで戦うなら、見物人のなぐさみものになるより我々自身の自由のために戦おう」と仲間たちを説得したと伝わる。これがそもそもの蜂起のきっかけであり、戦闘訓練を受けていたゆえに「剣闘士奴隷軍」は強力であり、ローマ軍に勝利しながら既にローマ社会に多数存在した他の奴隷たちも巻き込んで、勢力拡大していった。

そこに至る当時の社会的背景は次のようなものである。

- ① 栄華を極めた古代ローマの帝国への発展過程は、侵略戦争→属州の獲得とその搾取→さらなる略奪の欲望→侵略戦争というサイクルにあり、単に属州（領土）を獲得してその住民を搾取するに止まらなかった。即ち、侵略戦争によってローマは多数の戦争捕虜や被征服民族を奴隷とし、ローマ社会に投入したのである。
- ② ローマ軍の中核を占めていた自装兵士たる中小農民は、連続する侵略戦争のため長期に亘る従軍を余儀なくされ、掠奪戦争の報酬を受け取って帰郷した時そこにあるのは荒廃した農地と負債—この状況が中小農民の没落とその土地の放棄を招いた。更にこれが大土地所有の発展を促進することになるが、その大土地所有経営を可能にしたのは大量の奴隷投入に他ならなかった。
- ③ こうした変遷に従い「奴隷」はかつてのように温情的な家父長制的奴隷ではなく「もういう道具」と化していった。その奴隷の中でも最も悲惨で「人間的没落の最後の段階」として最下位に位置付けられたのが「剣闘士奴隷」であった。
- ④ 剣闘士奴隷は剣闘士養成所にて訓練を受ける。専門の剣技師範の下、最高の技術を習得するための訓練は激烈であり、その一方で二畳ほどの窓のない2人部屋、大麦を中心とした粗食といった劣悪な生活—そして最後には必ずしも生還が保証されぬ見世物としての試合、しかも生き残ろうとすれば仲間の剣闘士奴隷を殺さねばならないといったことの全ては剣闘士奴隷にとって耐えがたい苦痛であった。
- ⑤ 剣闘士奴隷が練習に使う武器は木製であり（彼らが本当の武器を手にするのは、闘技場での試合の時が初めてである）、厳しく見張られ自殺に利用されるおそれのあるものは全て採り上げられていたが、それでも自殺する剣闘士奴隷は絶えなかった。

ある者は唯一自分一人になれる場所＝便所で用を足す時に使う海綿を喉に詰め込んで自殺し、またある者は闘技場に運ばれる途中で眠ったふりをして頭を次

第次第に深く沈め、馬車の車輪に頭を突っ込んで自殺（当時の馬車は車輪が座席よりも高かった）したという。このような悲惨な自殺しかできないことは、**剣闘士奴隷の絶望的な、強制された、みじめでがんじがらめな生そのものを象徴するものである。**

- ⑥ この最も卑しむべき剣闘士奴隷の真剣勝負がローマ市民の最も好むところとなり、子供が剣闘士ごっこで遊び、少女が勝ち抜いた剣闘士奴隷に憧憬を抱き、大人は広場で剣闘士試合の話にうつつをぬかすという甚だしい倒錯こそが、頹廃した共和制末期のローマ社会の実態であると評される。
- ・このようなローマ社会に反旗を翻したスパルタクス率いる奴隷軍は誇りに満ち武勇に優れ「プルタルコス英雄伝」にも以下のエピソードが伝わる。
- ① スパルタクスたちがカプアからの追撃を撃退しローマ軍に初勝利した際、相手戦士の武器をたくさん手に入ると大いに喜び、（それまで手にしていた）**剣闘士の武器は不名誉だし野蛮だといって投げ棄てた。**
- ② クラッスス率いるローマ軍の前に初の大敗を喫した戦いで、奴隷軍は 12,300 人を斃されたが、その内背中に傷を受けた者は僅か 2 人で、他の者たちは全て戦列に踏み止まってローマ軍と闘い死んでいた。

## ■奴隷軍の戦績

- ①カプアの剣闘士養成所から脱走・蜂起
- ②カプアのローマ軍追撃を撃退、武器を奪う
- ③クローディウス率いるローマ軍（3,000 人）により丘陵に包囲されるも、密かに警備のない崖を降りてこれを奇襲、敗走させて営舎を占領した
- ④ウァリニウス傘下の 2 軍—即ちフリーウス率いるローマ軍（3,000 人）を敗走せしめた後、更に多数の軍勢とともに派遣されてきたコッシニウスを襲撃しこれも斃し、物資を奪った
- ⑤スパルタクス軍を取り囲んだレントゥルスの大軍に対して討って出て勝利しその荷物全部を手中に収めた他、続いて待ち構えていた 1 万のローマ軍も敗走させるなど、2 人のコンスルが直接率いるローマ軍をも撃破
- ⑥クラッススがローマ軍司令官に就任してからも、その副官ムンミウスが有利と見てクラッススの指示を無視し仕掛けてきた戦いにスパルタクスは勝利し、敵の武器を奪取
- ⑦スパルタクスと意見を異にする部隊が別行動していたところをクラッススに襲われ敗走させられたが、スパルタクスの率いる部隊がこれを食い止め、大きな被害は免れる
- ⑧スパルタクスではなくガンニキウスとカストゥスに率いられ独自に進んでいた部隊に攻撃の照準を合わせたクラッススに頑強な戦いを仕掛けられ、奴隷軍は 12,300 人を斃された（奴隷軍初の大敗）
- ⑨しかし丘陵地帯へと退却するスパルタクス軍を追撃していったローマ軍に対しては反

撃し、これに大勝した（ここで勝利したことが奴隷軍に思い上りを生じさせ、破滅させたとプルタルコス是指摘している）

- ⑩戦功を我が物とするため決戦を急いだクラッススに対峙し、スパルタクスも全軍を戦列に配し最終決戦が勃発、スパルタクスはクラッスス自身をめがけて突き進み2人のローマ軍小隊長を斃すなど勇猛に戦うも及ばず、最期は多くの敵に取り囲まれ切り刻まれ、奴隷軍も殲滅させられた

### ■スパルタクスという英雄（プルタルコス英雄伝より）

- ・カプアの剣闘士奴隷蜂起に於いて奴隷軍が選んだ3人の首領の筆頭であり、トラキア（現在のブルガリア南東部～黒海に至る地域）のマイドイ族の出身。
- ・勇気と力とに優っていただけでなく、知恵も温和な人となりも彼の境遇に比すれば立派であり、（野蛮なトラキア人というよりも）ギリシア人のようだった。
- ・拡大する奴隷軍にあつて、兵士の特性を見極め夫々重装歩兵、斥候や軽装歩兵に振り分け「軍隊」を編成した。戦いぶりは敵の裏を搔く知略に富み、またスピーディで的確な決断を窺わせる。
- ・ローマ軍を打ち破る＝ローマを征することではなく、奴隷たちが自由の身となりアルプスを越えて各々の故郷に帰還することを目指すという、極めて妥当な見識を持っていた。
- ・クラッススとの最終決戦がまさに始まらんとした時、スパルタクスは自分の馬をその場で殺した。曰く「戦いに勝てば敵の立派な馬がたくさん手に入るし、負ければ馬など必要ではない。」と。こうしたトラキア風の儀式を行うことによって、もはや帰還が絶望的となった故国への熱い思いを示すとともに、最後の戦闘に臨む奴隷軍を鼓舞したと評される。潔く命を賭して戦う強い意志をもった人物であった。

### 【出典・参考】

「プルタルコス英雄伝 下」

プルタルコス 著 村川 堅太郎 編 （筑摩書房）

「新版 スパルタクスの蜂起—古代ローマの奴隷戦争」

土井 正興 著 （青木書店）